

I. はじめに

校長 長澤 貴

毎朝、校門で子どもたちを迎えていると、笑顔いっぱい元気いっぱいの子どものみれば、何かあったのか、ちょっぴり元気のない子どももいます。人間だれしも365日、毎日すっきりした気持ちで朝を迎えられることなど難しいことであり、子どもも同様に、様々なストレスを抱え、様々な心の状態で登校してきています。だからこそ、学校は、全ての子どもにとって、安心して、楽しく学び合える魅力のある場となっていなければなりません。

この学び合える環境を子ども一人ひとりに保障していくためには、教職員一人ひとりが、自らの教育実践を授業公開という形で校内の仲間に問うことや、研究紀要を作成していく過程で実践を振り返ることにより自らの教育理念を再構築していくことで、資質・指導力の向上を図っていくことが必要であると考えます。

この教育研究を進めていく上で、私自身が現在でも大切にしていることが、お世話になった先輩から学んだ次の視点であります。

【追究し続ける教職員集団】

私たちは、それぞれの研究分野をもち、特技をもち、趣味をもっています。そして、それらを統合したところの味わいの違った人間として生きています。一つの物の見方・感じ方にしても違いをもつように、教材観・児童観においても見方・考え方に相違があります。

もし、同じ感じ方・考え方をしている同質の集合ならば、安定感があり居心地は良いことでしょう。しかし、議論の白熱化と発展は望めません。異質の集合だからこそ、観点の違いからくる指摘や、意見のぶつかり合いなどの中で、より広い、より深い、よりの確で柔軟性のある教育のあり方を見いだすことができるのです。

私たちは、創意ある関係を保ちつつ、自らの教育理念を見直し続けることができる教師集団でありたいものです。

私たちは、このような視点とともに、子どもを前にして自らの不足と至らなさを知ることができる謙虚な心をもっていなければなりません。そして、「教える専門家」から「学びの専門家」へと変容し、絶えず自分を更新し続けていかれる教職員でありたいものです。

最後になりますが、研究を進めるにあたりお力添えをいただきました 早稲田大学 小林宏己教授 をはじめ、県西教育事務所・小田原市教育委員会の関係の皆様、様々な形でご支援ご指導いただきましたことを心から感謝を申し上げます。